Robot of Empty Box

そんな人形への興味はいつしか当時の子供たちの間で流行っていたロボットへと移っていったのでした。山下の達ちゃんの歌ではないのですが、ご多分に漏れず僕もアトムの子になっていたのです。

アトムといってもテレビアニメではなく、まだ我が家にテレビがやってくる前のマンガ本の中のアトムでした。もちろんテレビアニメになってからも毎週欠かさずに見て、マーブルチョコレートのおまけのシールなども熱心に集めたりはしたのですが、今も記憶の中により強く残っているのはマンガ本の中のアトムなのです。それはまだ週刊漫画雑誌が創刊される以前、誕生日やお正月にお小遣をもらったときに買った月刊「少年」で読んだものだったのか、床屋の待ち時間に読んだものだったのか、貸し本屋で借りて読んだものだったのか、記憶は定かではないのですが、「ゲルニカ」、「赤いねこ」、「ブラックルックス」などなのです。もちろん「ロボイド」、「地上最大のロボット」なども大好きで、登場するキャラは今でもみんな覚えているのですが・・・。

食用の為に、巨大化させたエスカルゴが暴れだし、あらゆる兵器でも止められなくなった時、アトムが塩を撒くという原始的な方法でくい止めるという「ゲルニカ」、動物たちをつかって都市開発を阻止しようとして倒れた赤い猫面のテロリスト？が、実は武蔵野の自然を守ろうとした四足博士だったという「赤いねこ」、ロボットを次々に破壊するロボット差別の秘密結社の党首が、実は孤児だった自分をロボットの養母が育ててくれたということをアトム達が復元した養母のロボットの膝のぬくもりで知るという「ブラックルックス」、など寓意に満ちた話は、そのコマ割まで思い浮かべることができるのです。テレビアニメになってからの勧善懲悪的なアメリカンヒーローのようなアトムの活躍物語ではなく、人間の悲しみや愚かさを教えてくれたアトムがいたような気がするのですが・・・。

しかし人間の悲しみなど知りもせず、ただ愚かなほど無邪気なだけの子供だった当時の僕は、ただ単純にロボットが好きだったのです。それは、自分も天馬博士のような天才科学者になりたいと思っていたほど無知だったのです。だから毎日毎日　空箱を貼り合わせてロボットを作っていたのでした。というより空箱を貼り合わせたものをロボットと呼んでいたというほうが正しいのかもしれません。たとえばサイコロキャラメルの立方体の箱を頭として、牛乳石鹸の箱の胴体に貼り付け、手足はもちろんマーブルチョコレートの円筒形の箱といったようなもので、キャラメルと石鹸とチョコレートの臭いが入り交ざった

奇妙な臭いと同じくらい、奇妙なロボットだったのです。そんな中でも自慢のロボットは、段ボール箱を胴体にした大型のロボットで、頭の箱の目の位置をくりぬいて赤いセロハンを貼り中に豆電球をつけ、目が赤く光るというものでした。（配線が今のようにより線ではなくエナメル線で、エナメルがきれいに剥けず接触不良で思うようにはなかなか点灯しなかったのですが・・・。）またダンボールの胴体には、開閉する扉を切り抜き、中には小型のロボットが収納できるようになっていました。（これはゴミが出しっぱなしにならないという意味で母親にも好評でした。）

　これらのロボットは、もちろん歩くわけでもなく、ましてやしゃべるわけでもなかったので、そういう意味で当時の僕は、毎日空箱と話をしていたのだと思います。このロボットたちが、僕の記憶の中では、自分自身の手で作り出した初めての物だったように記憶しています。

写真の説明

写真１：鉄腕アトム

光文社カッパコミックスから出た鉄腕アトムの単行本です。本棚の片隅で保存状態も悪く表紙などはボロボロになっていました。テレビアニメが始まってから出たものですが、鉄腕アトムのシリーズとしての単行本としては、初期のものだと思います。僕は当時　本の帯としてついていたシールが欲しくて買った覚えがあります。

写真２：空箱のロボット

昔を思い出しながら作ってみました。それにしても、「サイコロキャラメル」、「マーブルチョコレート」、「牛乳石鹸」がマイナーチェンジはしているものの、商品として４０年以上も続いていたことに、ある種の感動を覚えました。